

令和8年度

入学試験問題

国語

注意事項

1. 試験問題は指示があるまで開かないでください。
2. 解答は必ず解答用紙に記入してください。
3. 字数制限のある問題は、句読点や符号も解答の字数に含みます。
4. 問題冊子・解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。

受験番号	氏名	

近畿大学附属広島高等学校東広島校

問題は次のページから始まります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

中学や高校の勉強では、ずいぶん暗記をさせられた。歴史の年代や英単語、化学の元素記号など、暗記しなければならぬものは、山ほどあった。正直言つて、暗記は好きではなかった。数学の問題を解くほうが、よほど楽しかった。暗記は、さして意味もわからずに、ただ繰り返し覚えるだけだから、そう楽しいものであるはずがない。どうしてこんなにもたくさん暗記しなければならないのか。そう思うことがたびたびあった。

意味もわからずに、ただ暗記しても、しようがないだろうと思われがちだが、じつさいは、結構^①暗記は役に立つ。中学のときの世界史で、中国の歴史を習うとき、まず、最初に歴代王朝の名称を丸暗記させられた。殷^{いん}、周、秦^{しん}、漢、隋^{ずい}、唐、……。それぞれの王朝がいつごろなのか、どんな時代だったのか、いつさい知らずに、ただただ覚えた。そんなことをして何になるのだろうと思つたが、王朝の名称と時代順が頭に入っていると、そのあと学んだ具体的な事象を整理し、一望するのにすごく役に立った。中国の壮大な歴史の全貌を頭のなかで一挙に思い浮かべてみるのは、なかなか爽快なものである。何十年もまえのことなので、もうはつきりとは王朝名を思い出せないが、あのとときの爽快感だけは、いまでも明瞭に残つてい

る。
日本人初のノーベル賞^A（物理学賞）の受賞者の湯川秀樹^Bも、幼いころから漢文の素読を祖父にやらされたそうである。漢文の素読とは、意味がわからないまま、ただ漢文を声に出して読むことである。

を鯉^{こん}と為^いう。鯉^{おお}の大きいさ、その幾千里なるを知らず。化して鳥と為^なるとき、その名を鵬^{ほう}と為^なう。……」（『莊子』）と声に出して読む。^②意味もわからずに、ただただ読む。それは湯川少年にとってなかなかつらいことであつたようだが、その後、大人^②の書物を読み始めるときに、おおいに役に立つたそうである。漢字への慣れにより、文字への抵抗がまったくなくなつたのである。

このことに関連して、「単純提示効果」^③という面白い現象がある。同じものに何度も接していると、それを好ましく感じようになるという現象だ。意味のわからないもの、たとえば無意味な綴り (knjwja のようなもの) でさえ、とにかく何度も接していると、好感度が増してくる。人間は馴染みのないものには不安を抱き、慣れ親しんだものには安心感を抱く傾向がある。広告を繰り返すのも、この人間の心理を利用している。

お坊さんになる人はよく経典の暗誦^{あんしやう}を行う。「……色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是……」(『般若心経』^{はんにゃんぎやう})。漢文を書き下すこともなく、じかに音読みする。もちろん、意味はわからない。それでも、ひたすら繰り返し読み、おのずと暗誦していく。このような一見、無意味にみえることが、あとで経典の内容を学ぶうえで、すこぶる役に立つ。全文が頭に入っていることで、各部分の理解が容易になるのだ。

これと似たようなことは、私の専門の哲学^④でも起こる。哲学を勉強しはじめたころ、哲学の本は難解なので、なかなか最初から順に理解していくことができなかつた。理解したい箇所につつかると、とりあえずそれを読み飛ばしてつぎへ進んでいくしかない。そうすると、そのつぎの部分の理解が十分でなくなる。それでも、仕方ないから不十分な理解のまま、さらにさきへ読み進めていく。すると、またしても理解したい箇所につつかると、このようなことを繰り返していると、そのうちほとんど意味がわからなくなり、もう読み進めることができなくなる。こうして途中で挫折する。しかし、挫折したままでは、哲学書全体の理解は叶わぬ夢になってしまう。

大事なことは、理解しようなどと思わずに、とにかく全文を読みきることだ。なまじ理解しようと思うから、理解できなくなる、挫折する。最初から理解を求めなければ、最後まで読みきることができる。意味がわからなくても、文字面だけでも結構楽しいものがある。それを頼りにとにかく読む。そして繰り返し読む。もちろん、そうしたところで、わからない箇所が多すぎるから、「読書百遍意自ずから通ず^⑤」というわけにはいかない。それでも暗記するくらい繰り返し読んでおけば、そのあと必死の理解を試みることで、何とか理解できるようになってくる。理解できないまま全文を読みきることが理

解に至る必須の条件なのである。

それになりたいして、数学はひとつずつ順に理解していける。いやむしろ、そうやって理解を積み上げていかないと、全体が理解できない。このような場合には、意味もわからずに全体を暗記する必要はない。しかし、哲学のように、順に理解していくことができないものもある。各部分がわかって全体がわかるのではなく、全体がわかってはじめて各部分がわかる。このような場合は、意味もわからずに全体を暗記するくらい、何度も全体に接する必要がある。それが理解に向けての出発点なのだ。意味を気にせず、とにかく声を出して読む。文字を絵画のように楽しみ、音を音楽のように楽しむ。これが理解へと至る要諦^④なのである。

Ⅱ、いまの時代、そう頑張つて暗記しなくても、ネットで検索すれば、必要な情報はすぐ手に入る。中国の歴代王朝も、漢文や経典のテキストも、哲学の古典も、検索すれば、直ちに閲覧できる。わざわざ図書館に行く必要はないし、本屋を探し回る必要もない。情報がすぐ手に入るのであれば、それはいわば暗記しているのと同じではないか。理解を伴わない暗記は、情報をただ脳たのなかに貯めこんでいるだけだ。脳たのなかでなくても、すぐ取り出せるなら、ネットやパソコンのなかでもよいのではないか。こういった意見もよく耳にする。

たしかに、いまのネット全盛の時代になって、暗記の価値は下がった。このことは認めざるをえないだろう。文字が発明されて、情報が文書として記録できるようになると、暗記の価値は大きく下がったが、ネットですぐ検索できるようになると、暗記の価値はさらに下がったと言わざるをえない。しかし、それでも、暗記にはまだまだ重要な価値が残されている。^⑤ ネット検索ですぐ情報が手に入るといつても、暗記した情報を思い出すのに比べれば、かなり時間がかかる。瞬時に思い出せる心地よさに比べて、ネット検索はまどろっこしい。余計な広告が表示されるから、なおさらだ。

しかも、ネット検索では、理解に至る助けにならない。情報がネットやパソコンにあるだけでは、たとえそれがすぐ引き出せるとしても、情報はただそのまま蓄えられているだけで、何の変容も生じない。しかし、暗記していれば、理解してい

なくても、情報は無意識のうちにいっぱい「整理」されていく。具体的にどのようなことが起こっているかはまだよくわからないが、暗記した情報のあいだに何らかのつながりが生まれてくる。たとえば、同じ言葉が異なる情報に含まれていれば、それによってその異なる情報のあいだにつながりができてくる。このように情報が「整理」されると、それがのちの理解の助けになるのである。

① かりに脳を直接、ネットに接続できるようなになれば、キーボードを操作したりすることなく、瞬時に検索できるようになる。中国の歴代王朝は何だったかと思っただけで、歴代王朝が頭に浮かぶ。それは暗記した歴代王朝を思い出すのと何ら変わらない。脳科学と人工知能研究では、キーボードをカイス^アずに脳とコンピュータを直接つなく研究がじつさいに進められている。これをBMI（ブレイン・マシン・インターフェース）とよぶ。この研究が進展すれば、いずれ暗記したことを思い出すのと同じような仕方、コンピュータのメモリに蓄えられた情報をすぐ取り出せるようになるだろう。

しかし、そうであっても、コンピュータのなかの情報はただ蓄えられているだけで、暗記した情報のように、時とともに「整理」されはしない。「整理」されるためには、情報を蓄えたチップを脳内に埋めこまなければならぬだろう。そうすれば、チップ内の情報どうしや、チップ内の情報と脳内の情報とのあいだに何らかのつながりが生まれてくるだろう。そうなれば、チップ内の情報は「整理」され、暗記した情報と同じように、理解に至る助けとなるだろう。

ただし、脳内に情報チップを埋めこむことには、倫理的な懸念^{けんねん}がある。膨大な情報をいっぺんに暗記できるからといって、健常者に情報チップを埋めこんでもよいのだろうか。それは脳（それゆえ心）に取り返しのつかない損傷を与えることになるかもしれない。深刻な記憶障害のある患者にたいしてなら、ひとつの治療法として情報チップを埋めこむことも許されるかもしれないが、健常者にそのような危険なことを行うのはいかがなものであろうか。

このような倫理的懸念はあるものの、情報チップの研究は進められており、いずれ倫理的な懸念も克服されて、脳に情報チップを埋めこむ時代がやってくるかもしれない。そうなれば、ようやく私たちは暗記の苦役から解放されることになる

う。『ドラえもん』に「アンキパン」^⑤が出てくるが、これはノートや本のページに食パンを押しつけて、その内容を写したり、それを食べると、書かれた内容を暗記できるという便利な小道具だ。この小道具のように、情報チップを脳に埋めこめば、その情報を覚えられるという夢のような時代がやってくるかもしれない。もっとも、暗記がシユミ^①の人にとっては、暗記の価値がほとんどなくなつて、いささか寂しい時代になるかもしれないが。

このような夢の時代^⑥がやってくるのは、まだもつと先のことである。技術の進歩がイチジル^⑦しいサツコン^⑧にあつては、何百年も先のことではないかもしれないが、少なくとも数十年は先であろう。それまでは、やはり暗記をせざるをえない。電卓が普及するまえは、筆算やそろばんで計算をせざるをえなかったが、それと同じように、情報チップの埋めこみが可能になるまでは、暗記は不可欠であろう。暗記の苦役は続くが、暗記の喜びを見つけることも可能だ。円周率の小数展開を何万ケタまで覚えている人がいるが、膨大な数の並びを一举に脳裏に思い浮かべることができるのは、さぞ爽快なことであろう。嬉々^{きき}として暗記できるようになれば、それは人生の潤いのひとつとなる。

(信原幸弘『覚える』と「わかる」知の仕組みとその可能性』による)

※ 出題にあたり、本文の表記を改めたところがある。

(注) 要諦——ものごとの大事な点。

問一 二重傍線部⑨「カイ」・⑩「シユミ」・⑪「イチジル」・⑫「サツコン」のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

I

II

に入れるのに最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア たとえば イ しかも ウ だから エ つまり オ しかし

問三 傍線部①「暗記は役に立つ」について、ここでの具体例として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 中学二年生ではじめて習った元素記号にとっても興味が湧き、わずかな時間で丸暗記したことによって大きな達成感を得ることができ、さらには周りの人たちから高く評価されて、自分に自信が持てるようになった。

イ 小学二年生の時に、九九を完全に暗記するまで担任の先生の指導が続いて辛い思いをしたが、そのおかげで暗算の能力が上がり、買い物などの私生活においてだけでなく、仕事をするときにも様々な場面で役に立っている。

ウ 幼いころに家族とことわざかるたで遊ぶことが大好きで、両親に勝つためにかかるたのことわざを猛勉強し、すべて暗記した経験によって、言葉の意味の大切さを意識し始め、学力だけでなく、コミュニケーション能力も向上した。

エ 中学校の社会の先生に、徳川十五代将軍を年代の順に無理やり暗記させられて苦労したが、その知識が、高校の日本史の授業で江戸時代について学んだ時に、時代の流れやそこで起こった歴史的な出来事の理解を助けてくれた。

問四 傍線部②「意味もわからずに、ただただ読む」行為を、比喩を用いて肯定的に表した一文を、本文中から二十五字以内で抜き出し、最初の五字を答えよ。ただし、傍線部②と傍線部⑤の間から抜き出すこと。

問五 傍線部③「単純提示効果」という面白い現象」の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 意味のわからないものに不安を抱く人間も、何度も繰り返し経験するうちに不安すら好ましく感じるようになる、という奇妙な現象のこと。

イ 対象に接した経験が何度もあれば、意味のわからないものに対しても不安を抱かなくなり、良い印象を持つようになる、という興味深い現象のこと。

ウ 慣れ親しまなければ安心はできないはずなのに、ただ繰り返し接するだけで安心感どころか好感さえ抱くようになる、という不思議な現象のこと。

エ 意味がわからないことへの不安を抱いていた人間が、対象に何度も接することで意味を理解して安心感を得るようになる、という注目すべき現象のこと。

問六 傍線部④「哲学」の本を読むことについての説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 哲学の本は理解できないところがあるものなので、始めから順に丁寧に読み込んで、着実に理解を積み上げていくことが肝心である。

イ 哲学の本の全体を理解しようとすると挫折してしまうので、部分的な理解で満足しようという気持ちで読むことが大切である。

ウ 哲学の本はとても難しいものなので、理解できないところがあっても気にせず、文字面を楽しみながら最後まで読むことが重要である。

エ 哲学の本には意味がわからないところがあるため、意味は気にせず、ひたすら読んで暗誦していくことが必要である。

問八 本文の内容と表現に関する説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 二重波線部① 「ノーベル賞」・② 「湯川秀樹」のように、権威ある賞や偉人を具体例に挙げることによって、筆者の持論により強い説得力を持たせている。

イ 二重波線部③ 「読書百遍意自ずから通ず」という古くから共有された定説を否定することによって、筆者の考えが新しい観点であることを強調している。

ウ 二重波線部④ 「脳を直接、ネットに接続」・⑤ 「アンキパン」のように、実現不可能な話題を挙げることで、想定される自説に対する批判をあらかじめ回避している。

エ 二重波線部⑥ 「寂しい時代」・⑦ 「夢の時代」のように正反対の評価を述べることで、現代社会が極めて先行き不透明な状況であることに警鐘を鳴らしている。

二

次の文章は伊吹有喜いぶきゆきの小説『雲を紡ぐつむ』の一節である。高校二年生の美緒みおはいやがらせを受けて学校に行けなくなり、盛岡で工房を営む祖父のもとで毛織りの作業を学ぶことになった。ある日、祖父はこれまで収集してきたものを整理し始め、美緒はそれを手伝っている。以下の文章はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

「おじいちゃん、私ね、笑いが顔にくつついてるの。仮面みたいにベタツと貼り付いてる。楽しくなくても笑う。つらくても笑う。笑っちゃいけないときも無意識に

I

笑ってる。頭、おかしいよね」

「そんなふうに言うものじゃない。いつからだ？」

目を閉じて力を抜き、美緒は羊毛に身をゆだねてみる。

気持ち が 楽 にな っ て きた。

「わかんない。でも小学生の頃から、かな。人の目が怖い。不機嫌な人が怖い。だから嫌われないように『オールウェイズスマイル』。いつもニコニコしてた。そうしたら私には何を言っても大丈夫、怒らないって思われて、きつい冗談を言われるようになって……」

脂足あぶらあし、アピーと呼ばれた声がよみがえる。

その呼び方は好きではないと、勇気を振り絞って言ってみた。しかし「本当に脂足だったら逆にそういうこと絶対言えないって」とみんなは笑っていた。

「そういう冗談を言う人たちは、私のことを『いじられキャラ』で、バラエティなら『おいしいポジション』って言う。でも、私、テレビの人じゃないから、いじられるの、つらい。でもそれを言ったら居場所がなくなる。だからまた笑ってる……。『オールウェイズスマイル』。そのうち学校に行くと、おながが下るようになった。満員電車に乗るとトイレに行きたくなる。もししたらどうしよう。毎日そればかり考えてた」

「それはつらいな」

祖父の声のあたたかさに、美緒は薄目を開ける。^① 気持ちのいいお湯に浮かんでいるみたいだ。

「それでね……ひきこもって。^② 駄目だなんて思うの。逃げてばかりで。甲羅に頭をひっこめてるばかりじゃ何も解決しないのに」

それは亀のことか、と祖父がのんびりと言う。

「固い甲羅があるのなら、頭を引き込めてもいいだろう。棒で殴る輩^{やから}が外にいるのに、わざわざ頭を出して殴られにくいこともないぞ」

祖父が台車を押して、柵の前から離れていった。

「待って、おじいちゃん。手伝います」

羊毛のなかから出て、美緒は台車に手を伸ばす。

「それなら一服つけてから作業をするか。ソファの近くにこれを運んでおいてくれ」

屏風^{びよぶ}で囲った寝室に祖父が入っていった。窓を開ける音がして、甘い香りがかすかに漂ってきた。

祖父の煙草^{たばこ}はこの部屋と同じ、謎めいた香りがする。

祖父が発送する荷物は大量のスプーンだった。長年、日本と世界のさまざまな土地に行くたびにこつこつ集めてきたもので、木材や金属などでつくられたものが一本ずつ仕切られたケースに整然と納まっていた。

「いつかこのコレクションを持って旅に出ようと思っていた」

銀色のスプーンをクロスで磨きながら、祖父が笑った。

「路上に絨毯^{じゅうたん}を敷いて、さじをずらりと並べて買ってもらうか。興味を持った人には来歴^③を披露する。どこの産か、どうやって手にいれたか、どこが魅力か。のんびり客と話をしながら、さじの行商をするんだ」

「荷物運びとかいらんない？ そしたら、私もすみっこにいる」

「体力的にもう無理だ。一度ぐらいやってみてもよかった」

祖父が今度は木製のスプーンを布で拭いた。素朴な木目^①をいかしたスプーンで、コーンスープやシチューをすくって食べたらおいしそうだ。

「でも、良い落ち着き先が見つかったんだ。若い友人が料理屋を開くので、彼女に譲る。好きなさじを客が選んで食事をする仕組みにすると言っていた」

鉱物に本、絨毯や織物。他にも祖父が集めているものはたくさんある。染め場の奥にはエアコンで常に温度と湿度の管理をしているコレクション用の部屋があるほどだ。

「どうしてスプーンを集めたの？」

「口当たりの良さを追求したかったのと、あとはバランスだ。良い職人が削ったさじは軽くて美しい。手に持ったときのバランスが気持ちいいんだ。そのさじで食事をすると軽やかだな。天上の食べものを口^②にしている気分になる。同じことは私たちの仕事にも言える」

「スプーンと布って、全然別物っぽく思えるけど……」

^③祖父が手を止めると、奥の部屋に歩いていった。すぐに戻ってくると、手には紺色のジャケットを抱えていた。生地はホームスパンだ。

「おじいちゃんのジャケット？」

「そうだ。お祖母^{ばあ}ちゃんが織ったものだ。持ってごらん」

渡されたジャケットは、見た目よりうんと軽く感じた。

「あれ？ 軽いね」

「それでもダウンジャケットにくらべると若干重いがな」

ジャケットを羽織ってみるようと祖父がすすめた。

袖に腕を通したとたん、「あれ？」と再び声が出た。手で感じた重量が身体に伝わってこない。肩にも背中にも重みがかからず、着心地がたいそう軽やかだ。それなのに服に守られている安心感がある。

「手で持ったときより、うんと軽い」

「手紡ぎ、手織りの糸は空気をたくさんはらむから軽くて温かい。身体に触れる布の感触が柔らかいから、着心地が軽快になる。さじにかぎらず、良い職人の仕事は調和と均衡が取れていて心地よいんだ。音楽で言えば」

「ハーモニー？ もしかして」

「そうだ、よくわかったな」

「私、中学からずっと合唱部に入ってたの」

祖父にジャケットを返すと、慈しむようにして大きな手が生地を撫でた。

「美緒は音楽が好きなんだな」

あらためて考えると、合唱はそれほど好きでもなかった。

熱心に部に勧誘されたことが嬉しかった。合唱部はみんな仲が良さそうに見えたから、その輪に入っていると安心できただけだ。

「部活、そんなに好きじゃなかったかも。なんか……私って本当に駄目だな」

ジャケットを傍らに置くと、祖父がスプーンの梱包作業に戻った。

「この間、汚毛を洗っただろう？ どうだった？ ずいぶんフンをいやがっていたが」

「臭いと思ったけど、洗い上がりを見たら気分が上がった。真っ白でフカフカしてて。いいかも、って思った。汚毛、好き

かも」

そうだろう、と祖父が面白そうに言った。

⑤「美緒も似たようなものだ。自分の性分について考えるのは良いことだが、悪いところばかりを見るのは、汚毛のフンばかり見るのと同じことだ」

祖父が何を言い出したのかわからず、美緒は作業の手を止める。赤い漆塗りのスプーンを取り、祖父が軽く振る。

「学校に行こうとすると腹を壊す。それほど繊細さがある。良いも悪いもない。駄目でもない。そういう性分が自分のなかにある。ただ、それだけだ。それが許せないと責めるより、一度、丁寧に自分の全体を洗ってみて、その性分を活かす方向を考えたらどうだ？」

「活かすって？ どういうこと？ そんなのできるわけないよ」

「そうだろうか？ 繊細な性分は、人の気持ちのあやをすくいとれる。ものごとを注意深く見られるし、集中すれば思わぬ力を発揮することもある。へこみとは、逆から見れば突出した場所だ。悪い所ばかり見ていないで、自分の良い点も探してみたらどうだ？」

「ない。そんなの」

「即答だな」

祖父がスプーンに目を落としたり。

「だって、ないから。自分のことだから、よくわかってる」

それは本当か、と祖父が声を強めた。

「本当に自分のことを知っているか？ 何が好きだ？ どんな色、どんな感触、どんな味や音、香りが好きだ。何をすると

お前の心は喜ぶ？ 心の底から

II するものは何だ」

「待って。そんなの急にいったい聞かれても」

「ほら、何も知らない。いやなところなら、いくらでもあげられるのに」

からかうような祖父の口調に、美緒は顔をしかめる。

「そんなしかめ面づらをしないで、自分はどんな『好き』でできているのか探して、身体の中も外もそれで満たしてみろ」

「好きなことばかりしてたら駄目にならない？ 苦手なことは鍛えて克服しないと……」

「なら聞くが。責めてばかりで向上したのか？ 鍛えたつもりが壊れてしまった。それがお前の腹じゃないのか。大事なもののための我慢は自分を磨く。ただ、つらいだけの我慢は命が削られていくだけだ」

祖父がテーブルに並べたスプーンを指差した。

「手始めに、気に入ったさじがあつたら、それで食事をしてみる。良いさじで食物を口に運ぶ感触をとことん味わってごらん」

「えっ、でも……」

戸惑いながらも梱包していないスプーンと、コレクションが納まった箱を美緒は一つずつ見る。祖父が集めたものは、どれも色や形が美しい。そしておそらく外見のほかにも祖父の心をとらえた何かがある——。しだいに興味がわいてきて、次々とスプーンが入った箱を開けて見る。

木材、金属、動物の角。さまざまな材質のスプーンを持ったあと、最後に残った箱を開けた。

赤や黒、赤紫色に塗られた木製のスプーンが出てきた。

無地もあるが、金箔きんぱくなどで模様を描かれたものや、虹色に輝く装飾①が施されているものもある。

一本、一本見ていくなかで、シンプルな黒塗りのスプーンに心惹ひかれた。手にすると、スプーンの先から柄に向かって、

真珠色の光が走った。

「おじいちゃん、これはうるし？」

祖父はうなずいた。

「これがいい、これが好き。おじいちゃん、このスプーンをください」

「美緒はこれが好きか。どうしてこれを選んだ？」

「直感？ 何かいい感じ」

⑥ 祖父の目がやさしげにゆるんだ。目を細めるとやさしく見えるところは、太一注と似ている。

ほめられているような眼差まなざしに心が弾み、黒いスプーンを見る。

幼い頃、壁にかかった視力検査表で視力を調べられたことがある。

黒いスプーンを右目に当て、おどけてみた。

「視力検査……」

一瞬、不審そうな顔をしたが、祖父はすぐに横を向いた。口もとに軽くこぶしを当てて、笑っている。

おどけた自分が猛烈に恥ずかしくなり、美緒はスプーンを握った手を膝に置く。

たいして面白くもないだろうに、祖父は目を細めてまだ笑っていた。

(伊吹有喜『雲を紡ぐ』による)

(注) ホームスパン——手紡ぎの太い糸で織られた、素朴な風合いを持つ毛織物。

太一——美緒の親戚の大学生。

問一 二重傍線部②「披露」・③「木目」・④「若干」・⑤「施」の読みをひらがなで答えよ。

問二 空欄

I

II

に入れるのに最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア わくわく

イ もやもや

ウ ねちねち

エ へらへら

オ ぼやぼや

問三 傍線部①「気持ちのいいお湯に浮かんでいるみたいだ」とあるとき的美緒の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の苦しみに寄り添ってくれるような祖父の思いやりのこもった言葉に、安心感を覚えている。

イ 過去の辛い思い出にとらわれて、祖父の優しい声かけも耳に入らずに、不安な気持ちに駆られている。

ウ 苦い記憶に苦しめられそうになったが、祖父の優しいもの言いに、前向きな気持ちになれている。

エ これまでの嫌な思いをすべて受け止めてくれるような祖父の誠意のこもった返答に、勇気を奮い起こしている。

問四 傍線部② 「駄目だなんて思うの」・④ 「私って本当に駄目だな」とあるが、美緒はどのようなことが駄目だと思っているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 他人の気持ちを少しも気に留めることなく行動していたこと。

イ 自分自身の将来について真剣に考えてこなかったこと。

ウ 自分の本当の気持ちを素直に表していなかったこと。

エ 自分の今までの振る舞い方を何も反省してこなかったこと。

問五 傍線部③ 「同じことは私たちの仕事にも言える」とあるが、どのようなことが「私たちの仕事にも言える」というのか。「く」ということ。」「につながるように、本文中から二十五字以内で抜き出して答えよ。

問六 傍線部⑤「美緒も似たようなものだ」とあるが、ここで祖父が言おうとしているのはどのようなことか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 美緒が目を背けたいと考えている自分の嫌な部分も、他の人は温かく見守ってくれているので、もっと素直に振る舞えばいいのだということ。

イ 美緒が自分では受け入れがたいと思っている点も、見方を変えると優れていると捉えられるものであるため、自信を持って歩んでいくべきだということ。

ウ 美緒が自分では忘れたいと思っている過去も、周りの人には何とも思われていないことがよくあるので、あまり深刻に考えすぎない方がいいということ。

エ 美緒が許せないと思っっている自分の性分も、ただありのままに受け入れていこうと開きなおることで、人生はうまくいくものだという事。

問八 本文の内容と表現に関する説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「それでね……」や「えっ、でも……」など、美緒の言葉に比較的多く用いられている「……」からは、彼女が胸の奥でひそかに抱いている、祖父に対する心理的な壁の存在がうかがえる。

イ 「満たしてみろ」や「食事をしてみろ」などのように祖父の言葉には強い調子のもが見られるが、それらは人生の先輩として美緒をよりよい方向に導いてやりたいという心理の表れでもある。

ウ 比較的短い会話をつづけていくことによつて、文章全体にリズムを生みだしているとともに、最初は反発していた美緒と祖父の思いが次第の一つになつていく様子がよく表されている。

エ 美緒と祖父には年齢の差による価値観の相違によつて理解し合えない部分があり、スプーンやジャケットの話題を通して二人の心の距離が少しも縮まっていないことが読み取れる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、木こりの、山守(注)に斧(注)を取られて、わびし、心うしと思ひて、つらつちつきてをりける。山守見て、さるべきことを申せ。取らせんと言ひければ、

あしきだになきはわりなき世中(注)によきをとられてわれいかにせん

と詠(注)みたりければ、山守、返しせんと思ひて、うう、ううとうめきけれど、えせざりけり。さて、斧返し取らせてければ、
うれしと思ひけりとぞ。

人はただ、歌をかまへて詠むべしと見えたり。

〔宇治拾遺物語〕による

(注) 山守——山の番をする人。

斧——木を切る道具。「おの」のこと。

だに——さえ。

わりなき——どうしようもない。

えせざりけり——詠むことができなかった。

問一 二重傍線部ア「つらつゑ」・イ「をり」を現代仮名遣いに直せ。

問二 波線部a「申せ」・b「ど」の品詞を、次のア～クからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア	名詞	イ	動詞	ウ	形容詞	エ	形容動詞	オ	副詞
カ	連体詞	キ	助詞	ク	助動詞				

問三 傍線部①「わびし、心うし」の本文中の意味として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 恥ずかしい、腹立たしい。

イ つらい、情けない。

ウ うれしい、楽しみだ。

エ おもしろい、きれいだ。

問四 傍線部②「言ひ」の内容はどこからか。最初の三字を抜き出して答えよ。

問五 本文中の和歌「あしきだになきはわりなき世中によきをとられてわれいかにせん」の説明として適当でないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「あしき（悪しき）」と「よき（良き）」という対比的な表現を用いている。

イ 「よき」に「よき（斧）」と「よき（良き）」の二つの意味を持たせている。

ウ 「よき（斧）」という商売道具を取られてしまった木こりの心情が詠み込まれている。

エ 「世中」は、木こりと山守の信頼関係を比喩的に表現している。

問六 本文に関する先生と生徒たちの会話を読んで、後の(1)～(3)の問いに答えよ。

生徒A——最後の一行に筆者の主張が表れているんだね。

生徒B——「かまへて詠むべし」は「I」という意味ですよ。

先生——よくできました。具体的な話から教訓を導き出して最後に述べる、というのは古文でよくある形です。

生徒A——でも、どうして「かまへて詠むべし」なのですか。

先生——それを理解するためには、話の内容を正しく読み取ることが必要ですね。「うれし」(傍線部③)に注目して考えてみてください。

生徒B——わかりました。木こりは、II ことができたから「うれし」と思ったのですね。この教訓に納得できました。

先生——具体的な出来事を示すことで説得力が増しますね。この話は山守と木こりの双方にIII があったからこそ成立するんですよ。

生徒A——なるほど。古文に興味が湧いてきました！

(3)

空欄

Ⅲ

に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 慎み

イ 思いやり

ウ 教養

エ 自尊心

